

水争い

小道 周帆

「お天道様はわがままじゃ」

稲を刈り終えた今頃になって田圃に激しく降る雨に、恨みを抑えて、

「来年こそは、この雨を稲の成長する水無月の頃に降ってください。水なしでは過ごせぬ水無月にですぞ、お願い申し上げます」

多摩川の二ヶ領用水掛官に登用された田中兵庫は恵みの雨を降らせる天に向かって祈りを捧げた。同時にこのまま自然の脅威に任せるのではなく、人間の知恵で干ばつによる被害を未然に防ぐ手立てを考えないといけなないと自問するのであった。

二ヶ領用水は徳川家康が関が原の合戦を前にした慶長二年（一五九七年）に代官・小泉次太夫に命じて、米の収穫量倍増のために造らせた灌漑用水である。

命ぜられた小泉次太夫は多摩川の水を引き、稲毛領から川崎領までの二ヶ領に全長八里の用水を十四年掛けて完成させた。すぐ傍を多摩川が流れているにも拘らず、川沿いの平地は多摩川より高いがために水が得られなかったが、この用水によって二千町歩余の水田を潤した。荒れ地に水を行き渡らせるといふ大事業であり、領民には明日への希望を与える事業でもあった。

それにしても、家康様は天下分け目の戦いの前から、関が原での勝利を確信し、今後は江戸が中心になり人が集まることを予見していた訳だ。天下を取る人物というのは常に先のことを考えておられたのかと、兵庫は改めて家康様の偉大さを感じていた。

しかし、二ヶ領用水が出来て百年。その間には改修もされていたが、広がる水田に対して、数年に一度くらいとはいえ、いったん干ばつ見舞われると多摩川の水位が下がり、水不足が深刻になっている。それだけに常に先のことを考える多摩川の二ヶ領用水掛官としての役割を果たしたいと、田中兵庫はその役割の重要性を認識していた。

二ヶ領用水を巡っての水争いは毎年のように生じているが、兵庫が着任した今年の水無月は数年に一度の干ばつに見舞われ、各堀流域の百姓による水争いの騒ぎはすざましかった。

日照りが続いたことから、二ヶ領用水からの配水量が減り、久地二子堀・六ヶ村堀・川崎堀・根方堀への分水が上手く機能せず、最も水量割当ての少ない

六ヶ村堀の水不足が特に深刻で、遂に他の堀の分水樋を破壊するという前代未聞の妨害事件が起こった。

六ヶ村堀の流域農民は被害者意識が強く、もともと現在の分水方式への不満がその背景にあった。水不足による凶作の年には最初に被害が大きく出るのは六ヶ村であり、今年の凶作では借金が返済できずに、娘を売らざるを得ない百姓が数十人も出るといふ。

それだけに妨害事件が発覚する三日前に、二ヶ領用水代官のもとへ救いを求めて来た六ヶ村百姓・耕三郎とその妻・八重、そして娘のトミに、代官の指示とはいえ冷たく追い返したことが兵庫には重く押し掛かっていた。

とりわけ、十歳だというトミの悲しみの中に強い意志を示す目が、子を持つ親として、兵庫には忘れることが出来なかった。恐らく二、三日のうちに借金のかたに川崎宿に売られていくのだろう。

憐れであった。

トミの目を見ていると、忘れもしない二十年前の梅丸姐さんの目が浮かび上がってきた。

* * *

下つ端役人の頃、田中兵庫は先輩役人 洲上宗左衛門に連れられて初めて女を買いに川崎宿へ行った。東海道五十三次が整備され、川渡しの宿場は人の動きが激しいものの川崎宿は何となくみずぼらしい感じがした。

宗左衛門との道々での話によると、江戸を発った旅人は高輪大木戸で見送りの人たちと水盃を交わし、江戸と別れる。次の品川宿では出迎えの人を横目に見ながら二里先の川崎宿にやってくるが、ここでは軽くお茶を飲む程度で、先を急ぐ。京、大坂に一日も早く着きたい気持ちから、川崎宿は通り過ぎるだけだと言う。

「しからば泊り客は居ないわけ？」

「泊り客、遊び客は京から下ってきた旅人じゃ。江戸を目前に、永く掛かった旅の最後の癒し所にする訳ぞ」

「それじゃ、もつとお祝い気分で騒がしくてもいいのに：やけに静かですな」

「兵庫よ、貴様はまだまだ世間を知らぬのう。京から二十日もの日数を掛けて来ているのじゃぞ。路銀も残り僅かだろうよ」

「.....」

「銭のある旅人は出迎えの人で賑わう品川宿に向かうが、銭も無い、出迎えも

いない寂しい旅人はここで静かに安女郎を相手に過ごすのだ」

「安女郎？」

「そうだ、安く女を買えるのさ。給金の少ないお前をここへ連れて来てやった俺様の慈悲深い思いよ。この先、金に余裕が出てくれば二子宿へ行けば、そりゃいいぞ。楽しみにすることじゃ」

「二子宿・・・」

「あそこはなあ、大山街道に沿って妓楼が連なって賑わっている。大山詣の客がお相手になるのだ。どんな客だと思う？」

「江戸の商人かな」

「その通り。お大尽が遊興気分で大山詣をする訳だ。途中も贅沢三昧だぞ。当然、求めるのはいい女だ」

「初めてのお前には悪いが、川崎宿の女郎は田舎者だ。殆どが貧乏百姓の娘なのだ。それも二子宿で受け入れられなかった女が来ている」

「へえ」

「大丈夫、安心しろ。顔は悪いが素直なのが救いだ。お前にもいい女を宛がわればいいのだがな。まあ運だな。好みでない女が来ても俺を恨むなよ」

宗左衛門には馴染みの女がいるようで、早々に部屋に案内されて行った。先輩に置いておかれた兵庫は遊郭の三和土に所在無く立っていた。すると、やにわに現れた女に

「ひとりかえ、どう、遊んでいこうネ」

と、腕を取られたまま小さな部屋に連れて行かれた。初めてのことで何も様子が判らず、気分も情も湧かぬまま、ただその女の指図通りに身を任せ、忽ちのうちにことを終えてしまった。

「まだ若いねえ、お前さんは下っ端役人だろう。いいね、決まった給金が貰えて」

「・・・」

「わっちかえ、お前から貰った金は全て楼主のものさ。何せ、稲毛領の凶作の時の借金と利息に追いまくられているからね。一体いつになったら返せるのかね。もう十年以上もここにいるのによう」

「十年というと、子供の時から？」

「そうだよ、十歳で売られて来て、最初の五年は下働きよ。ようやく女になった時にはすぐ客を相手の女郎にされたのさ」

「稲毛領には有名な二ヶ領用水があるのに、凶作とは・・・」

「いいこと言うね。でもね、二ヶ領用水がなきゃ、あそこで百姓することもなかったんだよ」

「ええ？」

「寝物語にこんな話は似合わないけれど、お前さんが真面目だからいけないだよ」

この女の店での名前は梅丸姐さんと呼ばれていた。梅丸姐さんは突然、裸のまま居住まいを正して話し出した。

「二ヶ領用水は途中の久地で、四本の堀に分水されるのさ。ここで四本の堀を公平に分けようと、流域の田圃の広さに応じて堀の引き入れ口の大きさを決めただよ」

「最初は公平でよかったんだ。でもね、十年、二十年を経て、今はもう百年も経つんだよ。そりゃ状況も変わるといふものよ」

「わたちの生まれ育った六ヶ村堀流域の百姓は貧しいだけに子沢山の働き者が多くて、荒地を田圃に変えていったんだよ。水の量は同じなのに田圃の広さは二倍、三倍、四倍と広がったわけよ」

「どうだい、田圃は広がったが肝心の水が足りなくなるじゃないか。日照りが続くと忽ち水不足になり、米が取れなくなるわな」

「すると、わたちの様な女郎候補が生れるのさ」

世間知らずの兵庫はただただ聞くばかりであった。

「おかしいだろう。田圃を広げる働き者の六ヶ村が酷い目にあっているのだから。貧しさから這い出るために田圃を増やしていることが不幸を呼んでいる訳さ。でもね、惨めな結果を生むのは数年に一度だからと知恵の無いまま一生懸命に田圃を開拓しているのよ」

「だけどね、凶作の時に年頃になった女っ子は堪らないよ。借金の犠牲になるのさ。わたちもそんなわけで川崎宿の妓楼に売られてたんだ」

あれだけ兵庫に色気で媚を売り、その気にさせてくれ、しかも自身も悦びの絶頂に達したかのような振舞いをしていただけに、別の梅丸姐さんが現れたような錯覚がした。

「年季が明けたらすぐにでも六ヶ村に戻るつもりだ。そして何としても今に合った公平な分水にしてもらうように命を賭けるつもりだよ」

この時の梅丸姐さんの意志の強い目の輝きが、兵庫には何にも増して印象に残った。初めての色遊びだったが、そっちの記憶は全く無く、梅丸姐さんの目

だけが心に染み込んだ。

* * *

あれから二十年。兵庫は梅丸姐さんの話を忘れなかった。百姓が精を出し、年貢をしっかりと納めてくれるから、世の安寧があるのだ。その百姓が水争いをするようでは政ごとの基本が崩れる。それだけに兵庫は将来、二ヶ領用水の代官になり、先人の小泉次太夫のような大きな仕事をしたいと考えていた。

目的を持って仕事をしている兵庫は明らかに他の役人とは違っていた。同僚は無論のこと、川崎領、稲毛領の両領主からもその働き振りは認められていた。

念願の二ヶ領用水掛官に異例の早さで昇格できたのも兵庫の仕事振りや勉強振りから、だれもが認めるところであった。

その任務は水争いを未然に防ぐ手立てであり、流域の民百姓の訴えを上手く処理することであった。

着任するや分水樋の妨害事件が起こった。六ヶ村堀流域の百姓は水不足から騒動を度々起していたが、今年はその極めつけというべき、久地二子堀、川崎堀、根方堀の分水樋を破壊し、六ヶ村堀にのみ水が流れる前代未聞の重大事件が起こったのだ。

翌朝、水が来ないので、久地二子堀、川崎堀、根方堀の三流域民が分水樋の様子を見るや、ただ事では済まない緊迫した雰囲気となっていた。確かに一晩のうちに、しかも監視の目をくぐって三つの分水口を破壊するには誰かが指揮をとり、計画性をもった組織的な動きだと推測された。それだけに六ヶ村に隣接している根方堀流域の百姓は今にも六ヶ村を襲うかのような有様であった。

代官からは、武器を手にするような騒動にならぬように治めろとの厳命が下され、両領主の指揮の下に治安を守るべく警備役人が出された。兵庫に対しては、平穏に治まるよう関係者との折衝をするように命ぜられた。

兵庫は四流域の代表世話人に召集を掛けようと考えたが、被害流域の世話人と加害流域の世話人とが一緒では、怒りが先立ち治まるはずはないように思われたので、まずは怒りを鎮めることから手懸けた。

そのためには、まずは分水樋の復旧を最優先とし、水が従来通りに流れる改修工事優先させ、何とか十日で仮工事を終えた。そして六ヶ村堀については制裁措置として、話し合いがつくまでは配水を止めた。

その上で、兵庫は召集するのではなく、被害を受けた三つの堀流域の代表世

話人のところへ自らが出向いた。そこで、まずは分水樋の管理・整備の拙さを詫びた。

この配慮を敏感に感じ取ってくれた川崎堀の長老仁作爺からは、怒りを抑えた口調で、

「田中様も着任早々で大変な試練になりましたな。それなりの処置がどう行われるかは流域農民をはじめみんなが注目しております。まずは我々の所にお越しいただいた誠意は感じておりますぞ」

と慰労とも期待とも、あるいはお手並み拝見といった感じでの発言があった。

分水樋の設置場所に近い久地二子堀の一郎太からは、

「我が方は多摩川に沿った場所であることから、いざとなれば民百姓が総出で桶を担いで多摩川の水を汲みに行く方法もあります。今年の水不足では五度ばかり汲みに行きましたが、多摩川から離れた六ヶ村ではそうした方法も無いことから同情したい気持ちはあるものの、他の流域に迷惑を掛けることが判らぬとは、ちと浅はかな振る舞いではございませんか。六ヶ村の世話人清兵衛さんは相当な人物で、信頼しておりますのに・・・」

と、多摩川が近いだけに余裕のある口振りで呆れ返っている様子であった。

襲撃が突発しかねない噂の根方堀の熱血世話人耕助からは

「水が足りないのは何処も同じでございます。なぜ六ヶ村堀の連中はあそこまでの実力行使に出たのか。我々に争いを挑んできたと見るべきではないでしょうか。村の若い者は六ヶ村を潰してしまえと、今にも攻めようとするのを抑えるのに苦労した次第で、騒動を事前に収めるようご命令を頂きましたが、それなりの処分をして頂かないと世話人としての立場がございません」

と厳しく問うてきた。

「いま、詳細は探査中であるが、六ヶ村堀流域民の合意によるものではなく、ごく一部の跳ね上がり者の仕業だと思われる。争いを挑むほどの計画性があったとは思えない」

と、兵庫は穩便第一として答えた。

若干の温度差はあるものの同じ百姓であり、水不足の共通認識もあるのだらう、思いのほか穏やかな話し合いとなった。考えてみれば、六ヶ村流域の百姓の次・三男は他の流域の農家に婿養子として迎えられており、また女子どもは貧しさのゆえに近隣の村々に女中や手伝いに出向いていたりして、互いに交流

もあるのだろう。そんなこともあってか、今にも襲うかのような噂のあった隣接地の根方村ですら怒りはあったものの落ち着いた話し合いが出来た。

残るは犯人の追及と六ヶ村堀流域への制裁をどうするかにあった。そこで、六ヶ村堀の代表世話人清兵衛を代官所に呼び出した。清兵衛は一人で出頭するのを恐れてか、六ヶ村流域の他の集落の世話人五人と連れ立ってやってきた。

「この度は我が流域のバカ者が大変なことを致しまして、誠に申し訳ありません」

恐れおののいた様子で平身低頭して詫びの言葉を述べた。続いて、

「一部の者の仕業とはいえ、偏に代表世話人私めの責任であります。私への罰は何なりとも受ける覚悟であります。それに免じて、従来通りの配水をお願いいたします。それなくば流域の百姓は生きていけません。どうか、我が命に代えてでも水をお恵み下され」と悲痛な願いが出された。

「だがな、あれだけの分水樋の破壊は一人や二人では出来ぬぞ。各集落からそれなりの人数を出したのではないか」

「とんでもございません」

清兵衛をはじめ各集落の世話人も必死の形相で否定した。

「配水を止めているというが、他を破壊した間の水は六ヶ村堀が一人占めしていたのだから、水はどこかに貯められているのではないのか。それを使っているのであるから当然の措置だ」

ことを収めるための結論として、

「とにかく、代表世話人の貴様の命よりも、首謀者を差し出せ。全てはそれからだ」

と兵庫は断を下した。

それから二日後、清兵衛は五人の世話人と共に一人の女を連れて代官所に現れた。

「この者が首謀者でございます」

地面に顔を伏した女を指差して清兵衛が言い放った。

「女・女・女とな、これはどういうことだ」

兵庫は予想外の首謀者に疑いを持った。

「紛れも無く、分水樋の破壊を命じ、行ったのは私、多作衛門の娘ウメでございます」

「ウメ？ウメとな、顔を上げる。ウメよ、あれだけの破壊を女手一人とはいかぬであろう。他に手助けした者がおろう」

「いいえ、分水樋を破壊するという考えから実行までは私一人がやりました。手伝ってくれたのは善悪の判断のつかぬ子ども達です」

あらぬ展開に兵庫は戸惑いながら問うた。

「子ども？村の大人はだれ一人加わらなかつたと言うのか」

「ハイ。六ヶ村掘流域の百姓は真面目な、小心者ばかりです。お上に楯突くなんてことは考えもつきません。水不足のせいで米が取れなくても、自分を責め、借金のかたに泣く泣く女子どもを売ることまで凌ぐのが精一杯です。こんな悲劇はもう何十年も前から続いています」

確かにウメの言うとおり、山地に近い六ヶ村堀の流民は真面目で働き者で、新田開発の届け出は四流域の中では抜きん出て多いことから解る。また、治安上では目立った騒動もなく大いに助かっていた。それだけに今回の出来事は解せぬ所が多かった。

「私もその犠牲になりましたが、もうこんなことは私の代でお終いにしたいのです。それで子ども達に私の生い立ちを話しました」

そこには何の恥じらいもなく、いやそれどころか堂々としていた。

「だれ一人として、他の流域に女中に出されたくもありません。ましてや川崎宿や二子宿に売られてもいいという者はおりません。貧しいとはいえ自分たちの農地から収穫を得て、この六ヶ村堀の流域で過ごしたいと思っております」

ウメは一息つきながら、凜とした顔つきに変わり、兵庫を睨みつけるように「無いのは水だけです。しかも少し行けば多摩川が滔々と流れているのです。

なぜ水をもっと取り入れないのですか。百年前に作られたようですが、ここ三十年は何もして頂いておりません。その間に人は増え、田圃も広がりました。二ヶ領用水を現在の田圃に合った形になぜ改良しないのですか」

なかなか厳しい所を付いてきた。兵庫の尊敬する小泉次太夫が家康様の命を受けて、米の収穫量倍増を図るべく造られたこの灌漑用水もウメの言う通り、ここ三十年は何の手立てもなく過去の状態のままになっていた。だからこそ、兵庫は二ヶ領用水代官所に任官してきたのだ。二ヶ領用水の改修についてはウメと同じ思いを持っており、冷静にウメの話を聴いた。

「こんな悲惨な状況を子ども達に話しました。子どもとはいえ、このままでは六ヶ村はいつまで経っても貧しさから逃げられないという私の言うことに賛同してくれました。お役人をはじめとして流域の皆にそのことを気づかせるに

はどうしたらいいか、子どもながらに考えたのです。そして、二ヶ領用水のお陰を被っている人みんなに、六ヶ村堀流域の私たちの感じている痛みを感じてもらおうとの思いで、他の堀の分水樋を壊し、水が流れないようにしたのです

― その語り口には命を賭けた者のもつ清冽な響きがあり、またその目には大きなことをやり終えた輝きがあった。

「ウメ、頭を上げて我が顔を見ろ！」

「・・・」

「ウメ、いや梅丸姐さんであろう」

「梅丸って名を知っている・・・」

ウメは思い出したくもない苦勞の連続だった川崎宿での女郎時代のことか頭に掠めた。役人の顔を覗くように伺った。

「ああ、あのときの若いお役人さん・・・」

「そうだ、田中兵庫という。お前の言葉、目の輝きを忘れずに、いま二ヶ領用水代官所の掛官をしている」

「・・・」

「二ヶ領用水の分水には不満はあろう。だからといって、いきなり他の堀の分水樋を破壊しても解決する訳ではないだろう」

「水を奪うことが目的ではありません。川崎堀にも根方堀にも久地二子堀の流域のお百姓さんにもこのままでは水が足りなくなることを知らしめたかったです。どうか兵庫様、私の命は川崎宿で終わっています。何の惜しさも在りません。死は覚悟しています。何としても二ヶ領用水を全面改修して頂きたいのです」

「判った。沙汰あるまで置き場で待て」

兵庫はウメの処罰に迷いがあった。今後の見せしめに重い罰を科さねばならぬとの思いと、ウメを死罪にした場合の反動も心配された。現に助命嘆願書が六ヶ村堀流民を中心に大量に寄せられており、子どもからのものが多いのも、今回の背景から領ける。処置を誤ると暴動も生じかねない。

代官である丹羽勘左衛門は高齢で、今年限りで引退を決め込んでおり、平穩にその任を終えたいと考えていた。それだけに全てを兵庫に任せ、見事に流域の百姓が納得いく処置をしたなら、自分の後継者に指名しようと考えているようであった。

平穏な解決と将来への希望を繋ぐには、兵庫が以前から夢みた小泉次太夫のような仕事をする事だと解っていた。いや、是非にやり遂げたいというのが、梅丸姐さんと出会ってからの自分の天命だと思つて今日まで来たのである。

そのためにどうするのか。兵庫は永年にわたつて考えてきた方法を今こそ実行してみようと思つた。それは従来のお上からの一方的な指示ではなくて、流域の民が考え、自らが関わる事であつた。そのためには二ヶ領用水代官所が流域の人心を掌握し、その信頼関係で流域民が協力して行動へつなげるための具体的な方策が必要であると考へた。先ずは二ヶ領用水のあるべき姿を全流域民とともに考へ、それによつて潤う民百姓の将来像を描かせることである。同時に具体的な作業を口先だけの説明ではなく、その成果を代官所の責任で約束することが重要だと考へていた。

四堀の代表世話人にこんなことを語つた。

「二ヶ領用水を大改修し、いまよりも二倍の水量を確保する。その結果、四堀には常に水が満々としてゐることを約束するぞ」

「この実現のために私は死力を尽くす。もしそれが出来なかつたときには、皆の前で腹を切る」

「いいか、この二ヶ領用水は代官や領主のものではない。四つの堀は全ての民のためのものである。ついでにはどう改修工事をすれば効果的かを考へて欲しい。各堀の流域民から選ばれた者が中心になつて策を練つて貰いたい。お上に頼るのではないぞ、みんなの為のものをみんなで改修するのだぞ」

こうして、兵庫は

- 一、将来像を示し、
 - 二、兵庫自らが責任者としてやり抜く覚悟を約束した。
 - 三、主体は民百姓である事を感じさせ、
 - 四、民百姓自らがこの改修工事に関わり、計画にも各堀の代表者が加わり、納得して取り掛かるようにした。
 - 五、そして最後に、この改修の実行をみんなの協力のもとで行なう。
- との基本方針を示した。

兵庫は自らが本改修の最終責任者として覚悟のほどを宣言したものの、この改修工事への資金は殆ど無かつた。それだけに流域農民に自分たちの用水路の改修に自分たちの労力を自主的に引き出す方法としての仕組を考へたのであつ

た。

各堀から選ばれた百姓を

第一班・取水口拡大班

第二班・分水口対策班

第三班・四堀の共通課題解決班

第四班・四堀検討班

の四つの班に分け、各班に自由に議論させ、毎日その報告を聞いた。その都度、励ましながらも、もつといい方法は無いのかと厳しい注文もつけ、こう言った。

「諦めてはいけないぞ。不可能を可能にする方法があるはずだ。子孫が未来永劫に富み栄えるまで、もう一息だ」

こうして出来上がった第一班の計画によれば、取水口を今よりも水位の高い上流に移動させ、渇水対策となるように貯水池を備えるというものであった。しかもその堤防の目的は稲田を守るためであることが誰にでも浸透するようにと既に「稲田堤」と名付けてきた。

「稲田堤とはよく考えたものだ」

兵庫はこのことだけで、この改修工事が成功すると確信した。

第二班の分水樋についての考えは、その源になる分水池を従来よりも大きな円形に改築し、四つの分水口が同じ高さで並んで設置するというものであった。但し、その大きさは現在の耕地面積に比例しており、全農民が完全に平等の水利権を確保するとの意思が示されていた。ここは利害争いで紛糾する所であるが、水量の大幅増により、互いにゆとりが出て大らかな気持ちが生じているのであると、兵庫は微笑んだ。ただし、将来の農地拡大への対応をどうするかとの問いを發し、再度検討をさせた。

その結果、現在の矛盾点を考慮し、五年毎に見直しをすることで落ち着いた。これには六ヶ村から強い要望が出ていたようで、その増産意欲は他の流域にも大きな刺激になったようである。

「六ヶ村のように我らも新田の開拓をし、五年毎にその成果を競うようにせねばなるまい」

「我が村にも働き者は大勢いることを示そうぞ」

こうした第一班、第二班の計画を受けて、第三班は貯水池から分水池までの新たな水路延長について効率の良い方法を考え出した。それは現行の二ヶ領用水の水路を延長するに際し、根本的に改修し、幅を広げるだけでなく、流域

を一直線に流そうというものであった。これにより多摩川から取り入れた貯水池の水を勢いよく分水池・分水口に流し込めることになる。

四堀のあり様を検討する第四班は、各流域の百姓が知恵を競い合うかのように盛り上がっていた。分水口からそれぞれの流域までの堀をどうするかということだから、真剣そのものであった。例えば堀の漏水防止のために、堀底に平らな形にして石を敷き詰める堀があるかと思えば、その上に堅木を並べるものや、いやいや木ではすぐに腐ることから竹を敷き詰めてはどうかといった按配であった。

こうして出来上がった案を実行に移すための手順や日程等も彼らに考えさせた。労働の提供は農閑期に流域民総出で掛かるということとなった。堀を造るというのは、田圃を耕すことに比べれば大変な労力を要するが、その共通認識は自分たちのためになるものを造るのだから労力を惜しまないとの意識であった。

こうして自分達の代表者の指導のもとで、それぞれが役割に責任をもって、過酷な仕事にも拘らず嬉々として働いていた。

兵庫も時々見回りに行ったが、その進捗ぶりは目を見張るばかりであった。

「ご苦労だな。どうだ仕事の進み具合は？」

「田中兵庫さまのおっしゃった通り、我らのためにしていることで、この努力が将来の流域農民の幸せに繋がるという思いほど力になるものはありません」

「働き者でなかった俺ですらこんなに働いとります。どんな連中も目の色が変わっております」

この共同作業がいろいろと副次的なものにまで気づかせていることに兵庫は満足した。

そして、流域の稲田が黄金色に輝く様子を想像するのであった。

ウメはというと、暫らくは留置されていたが、だれかれと無く

「今、こうして二ヶ領用水の大改修が行なえるのはウメのお陰だ」

との声が高まっていた。

被害を受けた三つの堀の流域民からも嘆願書が出され、これ以上ウメを置き場に閉じ込めることもあるまいと、特段の咎めもせずに釈放した。

「兵庫様のお考えと実行力には感謝感激しております。しかもわっしと出会った二十数年前から二ヶ領用水の改修をお考えだったとは驚きでございます」

「いやいや、これもお梅姐さんの目の輝きがあったからこそだ。今日の私を育ててくれたのも、そちの強い意志が私に乗り移ったからだ。私の方こそ感謝しておるぞ」

そして今、ウメは分水口対策班の一員として、二度と破壊するようなことのない分水口と分水樋の工事でその指導力を発揮していた。

時は享保九年（一七二四年）の春のことであった。

* * *

その後、この分水樋は何度も改修されたが、昭和十六年（一九四一年）には国が当時の科学技術の粋を集めてサイフォンの原理を応用した円筒の切り口の角度で分水量を調節する設備を完成させた。

現在では、『国登録有形文化財 二ヶ領用水・久地円筒分水』として残されている。

完

（10593字）

参考…本作品は第十四回（2011年9月）に発表した『二ヶ領用水改修秘話』を一部修正したものです。

注…『国登録有形文化財 二ヶ領用水・久地円筒分水』の説明版に、

「二ヶ領用水は「久地分量樋」で、四つの堀（久地二子堀、六ヶ村堀、川崎堀、根方堀）に分水されていましたが、なかなか正確な分水ができず、それぞれの水量をめぐり、水争いが絶えませんでした」との記載を参考に水争いをテーマとして創りました。

なお、解決策は金銭面等で問題になっている日産ゴーン氏が日産再建の際に行った『ゴーン手法』を採りました。